

---

# 春の季節のしょうもない出来事

桜楼月華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春の季節のしょうもない出来事

### 【Nコード】

N9549R

### 【作者名】

桜楼月華

### 【あらすじ】

春の季節。出会いと別れと再会と。いろんなものが起こる季節。その別れを味わった俺の、ちょっとした出来事。

(前書き)

春です。なんか思い立ったから行きあたりばったりの物語書いてみました。

部屋を明るくしてパソコンから三メートルは離れて見やがってください。

春。それは出会いの季節。そして、別れの季節。あるいは再会の季節。

皆さんはどの様な春をお過ごしですか。私、前川シンジは別れの春を味わっております。

一か月前に彼女ができました。ツインテールのなかなか可愛い子で、クラスの中でも人気がある。容姿よつしたんれいすのうめいせき端麗頭脳明晰。異性からも同性からもクラスで一番：下手をすれば学校で一番人気がある人物だと言えよう。

その彼女と過ごした一ヶ月間は夢の様に楽しかったです。そして今、その日々は本当に夢と化してしまいました。もう二度と見ることはできないでしょう。

「……あーあ、やる気でねえ」  
魂の抜けた抜け殻の様な我が体は死体の如く、ベットにうつ伏せの状態になって活動停止モード。

「はあ……」と大きく溜め息をした直後、腹の虫が鳴った。  
朝は寝坊して飯を食っていない。学校は始業式だけやって終わったが故昼も食っていない。冷蔵庫の中漁るのも面倒だ。もう一度、大きく腹の音がなった。

活動再開。

ベットから起き上り、制服から私服に着替えを済ませます。それから手ぶらのまま外に出る。

\* \* \*

家の近くの大通りにマクドがある。俺の足はそのマクドを目的地として歩いていた。脳は活動停止状態。何も考えずボーっとしたまま歩く。なんとなくで左を向いた。

瞬間、脳の活動が再起動する。左にあった店は、女の子が喜びそうなキャワイイアクセサリーが大量に売っているアクセサリー専門店だった。実際、その店の中には女性が九割いた。残り一割の男性は店員だろうか。執事服みたいのを着ている………ん？うちの学校の制服（学ラン）着てるヤツもいる。そして、その男の隣に………私に身を包んだ元・彼女がいた。彼女の顔は険悪そのものだった。相手に気付かれないよう、逃げるように足早にその場を立ち去った。

\* \* \*

マクドは思ったより人は少なく、並ぶこともなかった。頼んでいたポテトLサイズ、コーラLサイズ、チーズバーガー一個がトレイに乗って俺に手渡されるまでもそんなに時間はかからなかった。

席は、外から見えない様な場所にした。だって彼女………否、元彼女に見つかりたくないから。そんなことを考えてる自分がちよっと嫌になった。

十数分で完食。そして完食した瞬間に気付いてしまった。食べる前に気付かなくてはいけないことに気付いた。

財布がない。

もとより学校で財布を持ち歩かない主義だったが、まさか忘れてきてしまうとは思わなかった。

無銭飲食。

その嫌な四字熟語が脳裏に浮かぶ。この様な犯罪とは一生縁は無いついて思っていたのに………。

この場合、どのような選択肢が正解なのか………。  
店員に正直に話す。しかし、これは最後の最後まで取っておくべき選択肢だ。他の選択肢を考えよう。

ならば、携帯電話で家族……もしくは知り合いに助けを求めよう。  
携帯電話はたしか制服のポケットの中に……。ん？しまった。制服

のポケットに入れっぱなしだ……。

ならばならば、トイレの窓から逃げるか？最も効率が悪いが、もはやこれしか選択肢はあるまい。トイレの窓はあるとして、その窓はどこに繋がっているのか……。異次元だなんてことはなくとも、ばれたとき逃げ切れるか不安だ。

……だとすれば、店員に正直に話すのが一番か。意を決し、席を立とうとした。その時。

「なにさっきから難しい顔してんの」

数秒間、ポカーンと声の主を見たまま体の機能が停止する。そこには元彼女が凜々しく立っていた。

「な、なによ。私の顔になんか付いてる？」

「いやいや、と首を横に振った。

「な、なんか用かよ……？」

ああ、俺のバカ……。考えさせるチャンスじゃないか。もう一度関係をやり直してくれないか、と頼める最初で最後のチャンスかもしれないんだぞ……。

「用って言うか……いや、そうね。ちょっと話が……ある、かな」

さっきまで凜々しかった彼女がちよつと俯いてしまった。一体、何だと言うのか……。

「隣、座って良いよね」

「あ、ああ。別に、構わない、けど」

妙に緊張してしまって舌が上手く回らない。口の中が渴く。喉が渴く。食道が渴く。胃が渴く。コーラを飲もうとしたが、中身はもう残った氷しかなかった。

彼女は俺の了解を得てから、俺の向かい側に座る。……隣じゃねえのかよ。

「そ、それで。話ってなんでしようか」

最後声が裏返った。しかし、彼女は気にせずに喋り出す。

「えっと、ね。私さ、人を見る目無いのかも……。あんたと別れるって言った理由ね他に好きになった男がいたからなんだよね……」

知ってますとも。女が男に別れ話を持ってくるときは、既に他の男がいると相場が決まっている。

「それでね、今日あんたと別れてからの数時間ね、その男といろいろ出掛けたの。言っちゃえばデートって感じに。でもね、気付いちやっただ。なんとなくで覗いた男の携帯のメールに、いっぱい女の子の名前が入ってたわ……。分かると思うけど、女たらしだったって訳。……なんか、ごめん」

「あいや、はは、それは反応に困りますね。にしても、今日の彼女には違和感がある。何故だろう。」

そんな感じに困惑している俺に構わずに

『それで、我儘わがままだっというのは分かってるけど、もう一度だけあんと付き合っちゃダメ、かな？』

なんて言われたら困惑度こんわくが高まっちゃいますね。まあ、そんなこと言わないだろうけど。

「それで、我儘だっというのは分かってるけど、もう一度だけあんと付き合っちゃダメ、かな？」

エスパ！現る！俺がエスパ！なのか相手がエスパ！なのか……まあ、単なる偶然だろうけど。それとも一ヶ月付き合うだけでも相手の心情とかが無意識のうちに読み取れるようになってっやうのかな、はは。

「そ、そんなこと言われてもなあ……」

頭を掻きながら困ってます、とアピール。とりあえず、

「あ、あのさあ、お金……貸してくれないか!？」

「ふえ？ お、お金？」

彼女もさすがにこんなこと言われるとは想像していなかったのだろう。素っ頓狂な声で表情はさっきの俺の顔を真似していると言っても通用しそうなポカーンという感じになっている。

「……あ、もしかして」

彼女の目が細くなって俺を射抜く。

「無銭飲食……?」

「うつ……！ し、仕方ないだろう！ 財布持ってきてないとは思わなかったんだから……」

最後の方になっていくにつれて力が抜けるように声の音量が小さくなっていってしまう。我ながら情けないと思う。

「はあ……あんたって本当に、ドジっていつかなんていうか……」  
呆れた、と言うのが表情に出ているのが分かる。自分でも自分に呆れている。こんなことバカ正直に言う自分に。

「やっぱり、あんたのことは私が見てなくちゃね。良いわ、貸してあげる。その代わり、この金額を二倍にして返してほしいわ」  
「え……、いや、二倍って……」

そう言いながら彼女は立上りレジの方に歩きだす。俺はちょっとだけ彼女の小さい背中を見つめていたがすぐに、その背中を追いかけた。

\* \* \*

彼女はレジを済ませた後、「私の家に寄っていかない？」と聞いてきた。ちよつと緊張しながらも断ろうとしたが、「なに？ 変な想像でもしてんの？ 心配しなくても、あんたの想像してるようなことしないわよ、汚らわしい」と言ってきた。なんか良かったやら悲しいやら……。

彼女の家はとても綺麗で埃一つ見当たらない。その時点でちよつと吃驚<sup>びっくり</sup>。しかし、彼女の部屋を見たときにもう一度吃驚した。

可愛い。

言ってしまうえば失礼かもしれないが、女の子といった感じの部屋なのだ。ちよつと大きめのクマのぬいぐるみ。白が基調となっているのは彼女らしいが、所々薄いピンクが入っている。しかも、彼女の足には白黒にニーソが……。私服も、今思えばいつもの彼女からは想像もできないものだった。感じていた違和感はこれか。

とりあえず、いつもの彼女からは想像もつかない部屋だった。



「なに、その顔。私がおんな部屋で寝たりお菓子食べたりしてるのがそんなに想像できない？」

失礼だと承知しながらも首を思いっきり縦にふった。彼女はちょっと笑った後にクマのぬいぐるみを抱きしめながらベットに座り、ぬいぐるみに顔を埋めた。

「いつもはね凜々しい感じにして、こういう趣味を持ってるの隠してるのよ」

「な、なんで？」

「だって…。恥ずかしいじゃん」

「…ブハッ」

吹いた。盛大に。唾が飛ぶのもお構いなしに。彼女はそういう反応をされるのが不服なのか、頬を膨らませ、口をとがらせる。

「なによ。悪い？」

「いや、いやいや。悪くなんかない。ただ、なんか今のお前といつものお前。全然違う人みたいに見えるちゃってさ。これまでの一ヶ月間でも見えなかった顔っていうのがあるんだな、って」

これが、偽りざるを得ない本音。俺が素直に思ったこと。

それを言うと彼女は一瞬、ポカンとしてから顔を真っ赤にさせた。「なによ…。それ。…。あ、そうだ。私の部屋見せたんだから、今度はあんたの部屋も見せてよね」

「ああ、機会があればな」

遂数時間前に別れたはずの男女が、またこうして普通に話をしてる。それがなんだか可笑しかった。人間関係なんてこんなもんだ。傷を負ってもすぐに直る。関係が壊ればまた直せばいい。壊れたら直らない、なんていう理屈は無い。これこそが、今年、ただ一度だけ訪れた春の季節に教えられたことだった。彼女の家の外に咲く桜を見て思った。

「こんなもんか、人間ってのは。しょうもねえ」

ベットでぬいぐるみに顔を埋めている彼女は、「？」を頭の上に浮かばせていた。

(後書き)

何が言いたかったのか。それは俺にも分かりません。感じ方は人それぞれ。その一人ひとりが感じたもの全てがこの物語の正解なのだと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9549r/>

---

春の季節のしょうもない出来事

2011年10月8日20時10分発行